



東北に、よりそって。

東日本大震災被災者支援活動シャンティの取り組み 2018年-2019年



ご挨拶

会長 若林 恭英

2011年3月11日発災した、東日本大震災は、今年(2019年)で8年目を迎えます。癒えることのない苦悩を負いながら少しずつ復興してきた年月といえるでしょう。 シャンティは、発災当初より緊急救援から復興支援に携わってきました。漁業・まちづくり等の支援を展開した気仙沼事務所の活動は、地元のNPO法人「浜わらす」に引き継がれました。また、移動図書館活動は、地域の状況に応じて岩手県遠野事務所から始まって、このたび閉所した南相馬事務所まで都合8ヶ所の拠点や事務所を移動しながら仮設団地などへの寄り添い活動を展開して来ることができました。こうして振り返ってみると、それぞれ報告書の行間に、むしろ地元の方々の協力や支えが

あったればこそ継続できた、と気づかされます。ここでシャンティが現地事務所を閉じることは、支援の必要がなくなったと考えているわけではありません、新たな関係のスタートとして今後ともこれまでつないできた縁をしっかりと結んで行きたいとむしろ考えています。それはとりもなおさず、今後の私たちの生き方、考え方に指針を与えることだからです。日常生活で当たり前と感じていたことが、失ってみて初めてその大切さに気づくのです。月日をかけて取り戻せるものもあるし、そうでないものもあります。そうしたかけがえのないものに心を注ぐことの大切さが、慰霊碑に刻まれた多くの方々の名前を読むたびに胸にせまって来るのです。

公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会

私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。



7年半のあゆみ

2011.3.11 東日本大震災

2014.3 登米沢地区の
集団防災移転、
土地の造成工事完了

2012

- 初動調査
- 気仙沼災害ボランティアセンター立上げ等支援活動開始
- 避難所にて活動開始
- 蔵内之芽組への支援開始

2013

- 「あつまれ、浜わらす！」プログラム開始
- まちづくり支援活動開始
- 前浜地区コミュニティセンター再建
- 蔵内 海の駅「よりみち」開店
- 「階上地区まちづくり計画」完成。
気仙沼市長へ提出
- 海外事務所
スタッフ訪問

2014

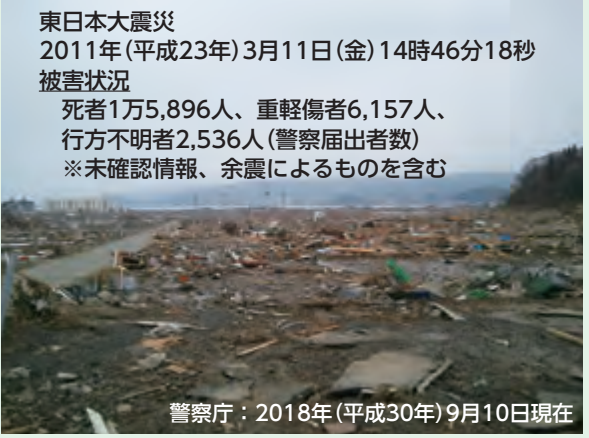
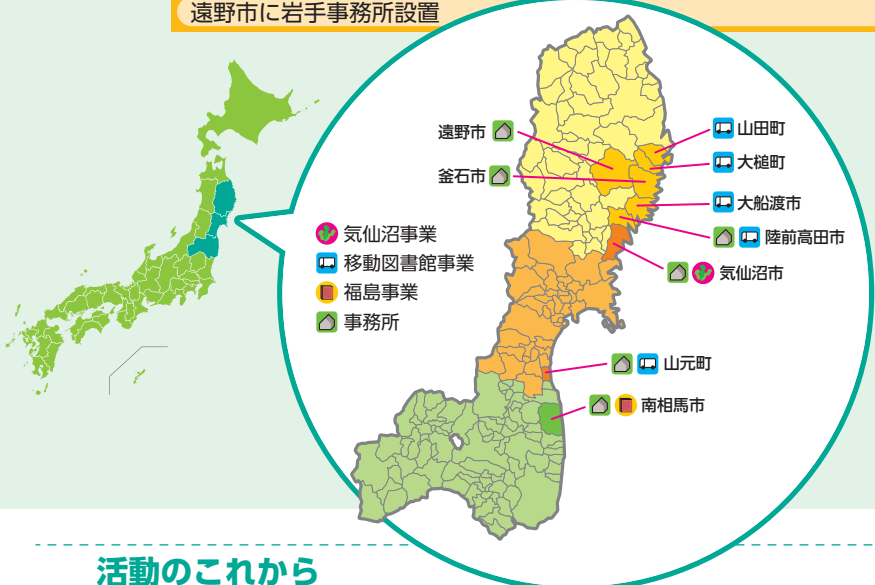
本吉地区に事務所兼宿舎(プレハブ)設置

事務所移転(同敷地内)トレーラーハウスへ

- 陸前高田市にて活動開始
- 大船渡市・山田町・大槌町の仮設団地にて活動開始
- 海外事務所スタッフ訪問
- 山田町立図書館と共同で
移動図書館活動開始
- 閉所、大槌町での活動終了
- 大槌町の仮設団地集会所・談話室にて文庫活動開始
- 大槌町金沢地区に「かねざわ図書室」を常設
- 陸前高田市モビリア仮設団地に「陸前高田コミュニティ図書室」を常設
- 山元町の仮設団地にて活動開始
- 南相馬市鹿島区の仮設団地にて活動開始
- 山元町に事務所設置

遠野市に岩手事務所設置

釜石市へ事務所移転



活動のこれから

「復興の入り口まで寄り添い続ける」ことを大切に、東北3県に事務所を設置し、7年9か月間、活動を続けてまいりました。この12月末に最後の現地事務所を閉鎖し、ひとつの大きな区切りとなります。

いまだに震災の傷跡が残る中、どこまでかかわるべきなのか、自分たちの都合で活動の終了を考えていないか、自問自答する厳しい選択でもありました。どんな活動にも終わりがあり、課題も残ります。

この3年間は、南相馬市において、「集いの場支援」、「聴き書き」、「発信・交流」などの活動を続けてまいりましたが、福島第1原子力発電所の放射能漏れもあり、天災に人災が重なる人類未曾有の災害であり、いまだに予断を許さない状況だと言えます。

今後は、東京事務所からの関わりとなりますが、今までにお付き合いをさせていただいた団体の皆さんとの協働、交流事業を軸に、これからの関わりを考えていきます。

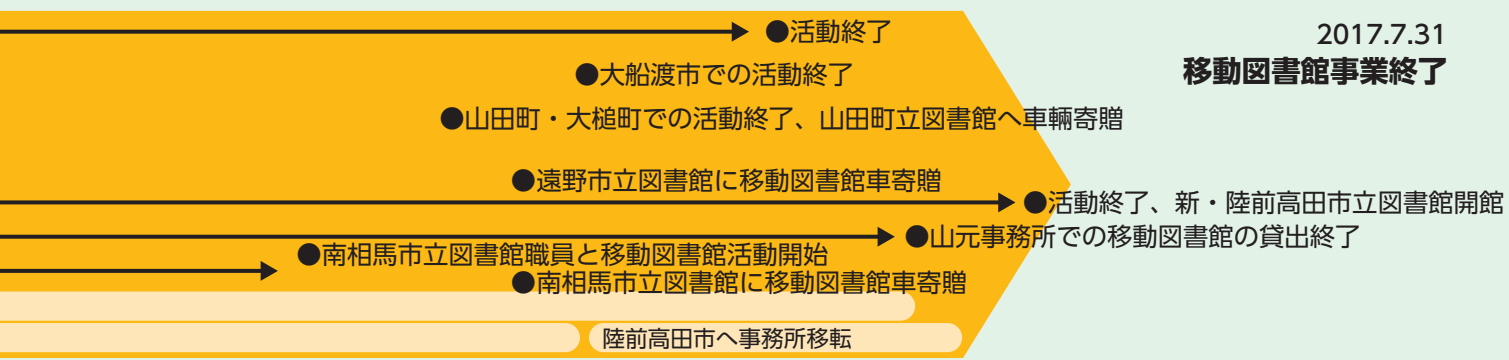
今後ともご支援、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。



●NPO法人 浜わらす設立



2016.5.31
気仙沼事業終了



2017.7.31
移動図書館事業終了

- 活動終了
- 大船渡市での活動終了
- 山田町・大槌町での活動終了、山田町立図書館へ車輛寄贈
- 遠野市立図書館に移動図書館車寄贈
- 活動終了、新・陸前高田市立図書館開館
- 山元事務所での移動図書館の貸出終了
- 南相馬市立図書館職員と移動図書館活動開始
- 南相馬市立図書館に移動図書館車寄贈

陸前高田市へ事務所移転



- 南相馬市の地元団体「まなびあい南相馬」の聞き書き事業サポート開始
- 小高復興チャリティ寄席実施
- 仮設団地にて「思い出のアルバム作成ワークショップ」実施
- 南相馬市立図書館による移動図書館活動サポート開始
- 南相馬市立図書館による災害公営住宅での移動図書館活動サポート開始
- トークショー実施

南相馬事務所設置

2018.12.31
福島事業終了

これまでの活動実績

気仙沼事業
 支援対象者人数 5600名
 ボランティア派遣人数 325名

子ども支援
 「あつまれ、浜わらす！」開催延べ25回
 子ども参加者数延べ286名(2015年度実績)

まちづくり支援
 対象地区 6地域の仮設住宅と1地域の避難所
 コミュニティセンターの再建 1棟
 ▶利用実績：年間94回
 ▶年間利用者数1709名(2016年5月現在)

福島事業
 福島事業は数字で表しきれない住民の「声」に耳を傾け、必要な支援を考え活動してきました。

移動図書館事業
 移動図書館の
 通算利用者数・貸出冊数

県	のべ利用者数	貸出冊数
岩手県	55,771人	118,100冊
宮城県	6,959人	16,400冊
福島県	5,386人	9,300冊

事業終了のご報告

2018年末、シャンティの福島事業は終了し、南相馬事務所(旧山元事務所)も閉鎖しました。南相馬事務所では、2012年10月から南相馬市内の仮設団地へ移動図書館車で訪問を続けていました。福島事業は、このときのご縁を大切にしましたので、2016年7月に帰還困難区域を除き避難指示が解除された、市内小高区を中心に活動しました。故郷に帰ると決めた方たちが少しでも心穏やかに暮らせるようにと、「集いの場づくり」「魅力の再発見」「風化防止」のお手伝いに努めました。2019年には、市内の仮設住宅の提供が終了し、小高区には市営の集いの場(復興拠点)もオープンします。将来に向けた課題は払拭されていませんが、生活インフラの整備状況なども見て、計画に沿っての活動終了となりました。



▲災害公営住宅を訪問。



▲10月の秋祭り。

集いの場支援

2016年7月に避難指示が解除されたとはいえ、南相馬市小高区はさまざまな課題を抱えています。そのひとつに、地域の過疎化、高齢化があります。小高区の現在の居住人口は3,121人(2019年1月31日現在)。発災時の登録人口1万2840人の約24.3パーセントに過ぎません。子どもや孫と離れて、ご夫婦でもしくはひとりで戻ることを決めた高齢者の孤立が心配されます。2018年も南相馬事務所は、小高に暮らす人たちが集う場づくりに取り組む組織・団体の活動に協力してきました。たとえば、市立図書館が災害公営住宅(仮設住宅からの移転先)を移動図書館で訪問するのと同様、お茶出しやお話し相手となるお手伝いをしました。また、社会福祉協議会が定期的に関する高齢者向けサロンでも、参加者のお話し相手役を務めました。さらに、サロンの企画にも協力し、サロンの中で落語会を開いたり(落語芸術協会の協力)、絵を描きながら心のしこりを解きほぐす「アートセラピー」の実施などにも取り組みました。

人々が集い、語り合う場はこれからも必要ですが、行政区ごとのサロン活動に復活の兆しが見られることから、シャンティでは集いの場づくりへの協力を終了しました。

◀高齢者サロンで落語ワークショップ。

子ども支援

2017年4月、小学校や中学校とともに、小高幼稚園も小高区内で再開しました。園児数は当初3人。2018年には14人まで増えました。園長先生に話をうかがうと、小高区は園児たちが外の環境や大人と触れ合う機会がまだ限られているということでした。南相馬事務所では、2018年5月から、月1回のペースで幼稚園を訪問し、読み聞かせや紙切りの披露などを行い、子どもたちとの交流に努めました(紙切りは落語芸術協会の協力)。

聞き書き

故郷に帰りたから、もしくは帰るしかないから帰って来た人の中には、「本当に戻って来てよかったのか」悩む人もいます。ただ、このような状況の元となった避難生活は強制されたものです。故郷そのものがネガティブな存在であっていいはずがありません。南相馬事務所では、2016年から、地元団体「まなびあい南相馬」による聞き書き活動に協力しています。



▲3月、トークショーを開催。
参加者から「被災地の様子は聞かないとわからない」という声。



▲小高幼稚園を月に1度訪れ、南相馬事務所職員が園児たちに読み聞かせを行った。

土地の方から、幼かったころの思い出、懐かしい料理、友だちとの遊びなどをお聞きする中で、これまで暮らしてきた、そしてこれから暮らしていく土地の魅力を再発見するお手伝いをしてきました。2018年は「食」を主なテーマとして、地元団体とともに、半年以上にわたり小高の集落に通いました。

発信・交流

震災の風化を防ぐには何をすべきか。微力でも何かしらその役に立ちたい。たとえば、先に述べた「聞き書き」は、話を聞かせてくれた人だけが昔を懐かしむのではなく、南相馬で暮らすこと、食べ物を育てること、季節を感じることを、市内外に向けて伝える、重要な発信になる。そう考え、地元団体が聞き書きしたことを冊子にまとめるまで、取材・編集面で協力を続けました。

2018年3月には、南相馬市に暮らす、シャンティの会員の方に登壇願い、トークショーを東京で開催しました。発災以来どのような体験をし、どのような思いで過ごしてきたのか、直接話をうかがうことで、聞き手も実感が得られ、想像の溝が埋められるのではと考えてのことです。このほか、シャンティの公式ブログを通じた情報発信、11月には、東京事務所が企画した、南相馬の今を知るためのスタディーツアーの開催にも協力しました。

2011年3月15日～2016年5月31日

つながる人の和 復興プロジェクト 気仙沼

東日本大震災の被災地で最初に活動を始めたのは気仙沼でした。気仙沼事業では「つながる人の和」をテーマに、地元の方々が協力し合える場や、協働の機会を増やすためのきっかけづくりを目標に、地域に根ざした3つの事業に取り組みました。

子ども支援

次世代を担う子どもたちが、海や山、森などの地元の自然の中で遊びや学びを通じて、本来持っている生きる力を引き出すためのプログラム「あつまれ、浜わらす！」を行いました。地域の年長者、漁師など地域で活躍する大人たちとの世代を超えた交流の場にもなり、様々な触れ合いの中で、子ども達のたくましく成長していく姿を見ることができました。2015年8月、活動と理念はシャンティの現地職員と地域の方々が設立した「NPO法人浜わらす」に引き継がれました。



まちづくり支援

2013年の春頃から、地域の住民による「復興まちづくり」が動き始めました。地域にとけこみ信頼関係を構築し、時にはつなぎ役、時にはワークショップの実施支援など、試行錯誤を重ねながら、大谷地区や階上地区、登米沢地区を対象にまちづくりのお手伝いをしました。

中でも津波で流された前浜地区の集会所「前浜マリンセンター」の再建では、2年半かけて住民参加型で建設され、地域の交流の場、コミュニティ再建の大きな一歩となりました。



漁業支援

わかめを主体にホヤ、ホタテなどの養殖漁業を営む協働グループ「蔵内之芽組」と、蔵内地区に住む女性たちによって運営されている海産物直売所兼食堂「海の駅よりみち」の生業支援を行いました。震災後、たった一艘残った船を頼りに漁業再開のために立ち上がった蔵内地区に住む漁師仲間のグループ「蔵内之芽組」へボランティアの派遣や加工場の建設などのお手伝いや、販売だけでなく地域住民が集まる交流の場も目指した「道の駅よりみち」での広報支援など、地域の人々が再びその地で生計をたてられる活動につなげることができました。



気仙沼はいま ～その後の活動～

NPO 法人 浜わらす 代表 笠原一城さんより寄稿

シャンティから活動を引き継ぎ、あっという間に5年目に差しかかるようにしています。時の流れと共に震災の記憶はどんどん薄れて来ていますが、常に私たちの活動を支えてくださる皆様には感謝と感動の思いで一杯です。本当にありがとうございます。

気仙沼市では復旧工事が進み、震災の面影を残す所も少なくなってきました。▲笠原一城さん
地方が抱える担い手の減少により、自治会の運営が困難な所も出始める中、いかにして、早い段階から子どもたちが地域に関わる仕組みを作るかが課題になっています。

2017年、2018年にはシャンティと協働し「災害が多発する日本において、どうやったら楽しく暮らして行ける



▲笠原一城さん

蔵内之芽組

現在も浜に活気を取り戻すために活動は続いています。水揚げを増やして売上を安定させ、漁業の後継者を育てるために日々を過ごしています。

裏表紙では蔵内之芽組の「こいわかめ」をご紹介します。



か」をテーマに、熊本×気仙沼の子どもたちで、防災キャンプを実施する事が出来ました。他地域で被災した子どもたちが同じ釜の飯を食べ、屋根を共にしたキャンプでは気仙沼の高校生が小学生たちと「生きる事」について学び合い、普段何気なく暮らしている「当たり前の生活」がいかに幸せな事なのかを皆で共有しました。これまでに無かった子どもたち同士の新しい繋がりが芽生え始めようとしています。

災害の多発が予想される日本において、被災地と被災地を繋ぎ、共に未来を考えるきっかけや場づくりを行っていく事は、平和を実現するために必要な「次世代の育成」そのものだと考えます。浜わらす単体では微力ですが、シャンティのネットワークを通じて

様々な地域の子どもの視野を広げ、これからもワクワクする未来を子どもたちと広げていきたいです。引き続きご支援と応援よろしくお願いたします。



▲熊本 × 気仙沼防災キャンプの様子

2011年6月6日 ~ 2017年7月31日

走れ東北！ 移動図書館プロジェクト

被災3県では、震災により多くの図書館が甚大なダメージを受けました。サービスを再開した市町村もありましたが、仮設団地からは通にくいという課題もありました。そこで始まった移動図書館活動。ただ本を貸し出すだけでなく、お茶を提供し、住民同士が自由に交流できる場や不安な気持ちに寄り添う場としての居場所づくりにつながりました。

いわてを走る

2011年7月17日、軽トラックの荷台にカラーボックスを載せた手作りの移動図書館車から始まりました。震災による被害は大きく、中でも陸前高田市立図書館は建物、蔵書に加え、図書館員全員が行方不明または死亡という大きな被害を受けました。シャンティは岩手県内4市町で移動図書館活動、仮設集会所での文庫活動、常設の図書室運営を行いました。地元や外部関係者の協力により、おはなし会などのイベントも実施しました。

またシャンティの海外事務所スタッフも現地を訪問。移動図書館活動に参加しました。



みやぎを走る

震災による死亡者の割合が女川町、南三陸町に次いで高い山元町で、2012年9月から活動を行いました。顔の見える活動を大切にし、運行先では地元の方との会話の輪が広がりました。また山元町での活動には、ブックオフグループの皆さんが定期的に参加下さいました。

最終運行日、利用された方からお手紙をいただきました。「移動図書館車が次に来る日が楽しみになったことで『明日』があることを感じられるようになりました」。活動で大切にしていたことが伝わっていたことを知った瞬間でした。



ふくしまを走る

震災による被害は津波だけではありません。東京電力福島第一原子力発電所の事故により、同じ町なのに避難指示が異なる南相馬市。20km圏内にある小高区の住民が多く避難した鹿島区、原町区の仮設団地を2012年10月から定期的に訪問しました。活動の中では、災害公営住宅等への引越し時期にも重なり、利用者数がだんだん減っていく様子も仮設団地の住民と共に見てきました。利用者数が減った分、じっくり話す時間を取れたことで、引越しをしても移動図書館の訪問時間に合わせて立ち寄る方もいました。



移動図書館はいま ~その後の活動~

ちゅうりっぷ文庫

2011年12月に岩手事務所にやってきた移動図書館車。岩手県、宮城県、福島県と6年あまりの間、シャンティの活動と共に一緒に走ってきました。長い旅を終え、今度は南相馬市の家庭文庫「ちゅうりっぷ文庫」の下で活躍することになりました。

ちゅうりっぷ文庫は、代表の梶田千賀子さんが毎週南相馬市の自宅の一室を開放し、自由遊びや読み聞かせ、親子読書なども行っている団体で、寄贈を機に車体のイメージも大きく変わりました。図書車を受け渡した当初、「震災後、飼い犬が亡くなり、引っ越しをしたら、震災後のいろいろなことがわっと噴き出して、ふと辛くなって。でも、図書館車を受け取って、自分たちのカラーで色を塗ってみたら、元気が出てきたみたい。近いうちに、市内で移動図書館活動を開始したいの」と笑顔でお話されていた姿が印象に残っています。

生まれ変わった「ちゅうりっぷ号」。希望と夢と愛と絵本を乗せて、南相馬市内を走ります。



南相馬市立中央図書館

南相馬市立図書館では、震災前から移動図書館活動の計画はあったものの、人手不足のために実施できていなかったそうです。震災から3年、南相馬市として移動図書館活動の開始を見据え、1年間シャンティの移動図書館活動で共に運行しました。2016年2月に引き継ぎ、今では災害公営住宅や幼稚園、保育園、老人保健施設、公民館など、市内約30か所を回っています。

シャンティと活動を共にし、ただ本を貸し出す図書館の機能だけでなく、見守り支援の一環としての機能もあることを学んだと職員さんは言います。震災で元いたコミュニティから離れざるを得なくなった方もいる中、住民との何気ない会話を大切にすることや、住民同士が集える場としての移動図書館活動の役割について考え、担当を変えずに通い続けることもまた新しい利用者層につながっているそうです。「お茶飲める機会あると話せるからいいね」「来てくれてありがとう」。そんな住民の言葉を励みに活動されています。



1995年の阪神淡路大震災以降、国内外での緊急救援活動を続けてきたシャンティにとっても、東日本大震災での被災地支援は大きな挑戦の連続でした。大規模で広範囲にわたる災害、時間の経過とともに変わるニーズ、海外を含む多くの方から届く支援の声、原発の問題、緊急救援から復興へ、地域の方々との連携、国内におけるはじめての移動図書館活動を通じた支援、4事務所30人を超えるスタッフ体制。活動に関わったスタッフひとりひとりが、「支援とは?」「寄り添うとは?」といった答えのない命題を抱え、奔走した日々。支援活動の記録だけではなく、スタッフが被災地で悩み考えたこと、シャンティの活動に関わっ

てくださった被災地の方々の思いが綴られた1冊です。6年間の支援活動を通じてシャンティが得た教訓を<人間観、文化観、死生観><支援活動のあり方>として12の視点にまとめました。是非、ご一読いただき、ご感想を共有できたら有難いです。

■書籍購入をご希望の方へ(注文方法)
 当会ホームページ「国内での活動」から
 お願いします。
お問い合わせ: 国内緊急救援担当



食べて応援!

気仙沼蔵内産「こいわかめ」

宮城県気仙沼市の蔵内^{くらうち}地区の寒流と暖流がぶつかる豊かな海で育ったわかめは、豊富な栄養分を吸収するため、肉厚で歯ごたえがしっかりとした味わい深い「うま味の濃い」わかめに育ちます。

津波の後で一艘だけ残った船をもとに漁業の再開を決意した漁師の協業グループ「蔵内之芽組」が育て上げた、本場のわかめを、ぜひ一度、ご賞味ください。

1袋500円
(税別+送料)



▶ご注文は「蔵内之芽組」のホームページ「ご注文・お問合せ」からお願いします。

使って応援!

「あんでねっと」復興のアクリルたわし



「あんでねっと」は、編み物をあんでネットワークを広げようという意味です。震災当初、被災地のお

母さんたちが仮設住宅の集会所を交流の場としてコミュニティづくりのために活動してきました。現在、仮設住宅も閉所に向かい、今後は活動地を変えて継続していく予定です。

商品は地元の特産品である海の生き物などをモチーフにしたアクリルたわしです。一つひとつ手作りの商品は洗剤を使わなくても洗える地球にやさしいエコたわしです。売上は制作者の手間賃と活動費に充てています。

▶ご注文は当会ホームページ「クラフトエイド」のページからお願いします。



寄付して応援!

募金のお願い

被災地の復興にはまだまだ時間がかかります。当会の現地事務所は2018年12月をもって閉所となりますが、今後も活動は継続してまいります。

引き続きのご支援をよろしくお願いたします。

▶郵便振替での募金

振替口座
 00170-80397994
 加入者名
 SVA緊急救援募金



東日本大震災支援募金 決算報告書

(2018年1月1日~12月31日)

【収益】

項目	金額
指定正味財産からの受取寄附金振替額	18,626,618
指定正味財産からの受取補助金振替額	0
雑収益	0
収益合計	18,626,618

※東日本大震災支援募金はすべて一旦、指定正味財産の受取寄附金/受取補助金として計上した後、費用に応じて収益に振り替えています。

【費用】

項目	金額
復興支援費(福島事業)	7,138,562
共通費用	11,488,056
費用合計	18,626,618

【2017年度寄附金・補助金】

項目	金額
東日本大震災・無指定募金	5,355,991
福島事業指定募金	877,767
合計	6,233,758

東日本大震災支援寄附金預金残高 22,071,032



公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会
 〒160-0015 東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
 TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220

WEB www.sva.or.jp ▶

